



「胃が痛い」では正しい診断がつきにくい 医療機関を受診するときは事前準備を



西村内科脳神経外科病院

医師 園田 隆次氏

いざ病気の症状を尋ねられると、しどろもどろになってしまおうという人は少なくないのではないのでしょうか。スムーズな受診のために心掛けたいことについて、医師に詳しく聞きました。

—受診時に自分の症状をうまく伝えられないという人が多くいるようですね。

患者さん自身が部位を特定して痛みを訴えたり、さまざまな手段で情報を集め、「私は〇〇の病気じゃないですか」と、先に病名を決めつけたりするケースは少なくありません。

例えば、おなかのあたりに痛みがあるとき、「胃が痛い」と自身の症状を訴えられるケースがあります。しかしその時点で、問題が起きている部位が胃とは限りません。胃痛ではなく、「この辺りが痛い」と、痛く感じ

る場所を指し示せば、医師はその周辺の臓器全般を思い描き、リストの高い順にいろいろなケースを想定し検査をします。診断が遅れてしまうと命取りになりかねない場合もあるので、患者さんの伝え方にも注意が必要です。

—具体的にどのように伝えるとよいのでしょうか。

まずは自己判断せず、①いつから②どのような症状か③どのくらいの頻度で、どのくらい症状が持続するのか④どんなときに症状が出るのかを丁寧に告げて、医師の診断を仰ぐことが大切です。病気によっては、突然症状が出るものもあれば、ゆっくりと進行するものもあります。「〇〇をしているときに突然」「2週間前からだんだんと」など、細かく伝えてください。頻度や持続する時間についても「10分〜1回」「〇秒続く」「〇時間続く」など、なるべく具体的に伝えると、より正確な治療につなが

ります。あらかじめメモに伝えたいことを書いて準備しておくのも良い方法でしょう。また手帳などに、日々の症状を細かく記録しておく、客観的に症状を伝える材料として役立ちます。

—その他、受診する際に準備した方がよいものや気を付けることはありますか。

可能であれば、症状や経過を把握している家族と一緒に受診されることをお勧めします。医師にとって、患者さんの生活習慣は診断の際の重要な情報源の一つです。自分では気付いていない行動を、家族が把握しているケースもあります。そこに診断の鍵となるキーワードが潜んでいる場合があるのです。痛みや不安を抱える中、事前準備をすることは困難に思われるかもしれませんが、しかし自身の症状を上手に医師に伝えることは、診断がスムーズになるほか、的確な治療を受けられるなど、結果的に患者さんのメリットにつながります。自己判断せず、具体的な症状を告げる準備をすることが大切です。